

信濃教育

巻頭言

職人の言葉

看護・医療の世界には「患者さんの皮膚の中に入りなさい」という言葉があるらしい。また日本舞踊では「舞い散る雪を拾うように肩を動かさない」という言葉があるようだ。どちらも熟達者が後進に指導するときに使う言葉だと思われるが、曖昧な表現だし、科学的には説明しにくく、誰でもが理解できる言葉ではない。教える者と教わる者の関係性や文脈に依存しながら、なんとなく伝達されてゆくような「言葉」である。たぶん、その技は、そうとしか表現しようのないものであろう。

これと同じようなことは、私たち教育の世界にもある。教育は専門性を必要とするし、教師という仕事は職人的なところがあるからだ。

「何をしてても教育だからなあ」

ある生徒指導案件についての対応が終わったとき、先輩の先生がつぶやいた言葉である。この言葉はその後も私の頭に残り、私のよりどころともなっていた。教育にはこれがベストということはない。かつてうまくいったことが全く通用しないこともある。何をしてても教育、何もしなくても教育（見守る、待つ、といった方がいいかもしれない）なのである。教育は教師の価値観、またその時の状況や子どもとの関係性などへの依存度が高く、流動的で不確実性が高い。だから、過去の成功体験にこだわってはいけないし、子どもを決めつけてはいけないのだ。先輩先生は「何をしてても教育」と言った。たぶん辛酸をなめるような経験を含め、この先生の教師としての物語から出た言葉だろう。

教育理論や教育技術などを勉強するだけでは教師は育たない。先輩の教師の言葉が、一人の教師を育て、支えていくことがある。だから経験豊富な先生は、自分の教師としての物語をもっと後輩に語るべきなのである。ベテランの先生たちの奮闘があって今の時代があるのだから、自信を持って自分の物語を語ってほしいと私は思う。時には嫌がられることもあるかもしれないが、それを恐れてはいけない。